

リスクはかりしれない療養環境お体験を

島本禎子さん「精神病棟看板架け替え問題」のお話をうかがって

14S3025

小宮玲子

精神病棟と言うと、居宅のケアマネとして、足立区の病院に退院前アセスメントに行った時の光景を思い出す。

階段から病棟に行く時に施錠が為され、入るとナースステーションにつながる。新規担当するご利用者は、統合失調症と認知症であった。

「治療する事はなにもないので退院」と言われて訪問した病院の環境は、生活とは程遠いものだった。

数十分ただけで空気が重い病室のベッドで、ご利用者から「本当に帰れるとは、信じない」と言われた言葉が更に重く感じられた。

一日も早く退院できる環境を整えようと思い、病院を後にした記憶がよみがえってきた。受け入れるご家族も不安を口にしながらの退院であったが、あの環境で生活していたらおかしくなってしまうと思い、退院支援を進めていった。

治療と生活について考えると、治療は短期間で行うものであるが、それにしてもあの環境は治療効果が見込まれるとは思えず、まして何十年も生活していくリスクは、はかりしれない。

「精神科病棟転換型居住系施設」を進めようとしているその人自身が、1～2週間生活してからどう考えるかという、体験の必要性を感じる。

また、精神科の治療効果の検証や評価も必要だと感じる。

私の目の前にあった精神科病棟は、2度と足を踏み入れたくない療養生活であったが、その精神科病棟を作り出したものは、「こうあるべき」という日常生活の中の「常識」？であることも、忘れてはいけないと思う。

P. S. ゆきさん

えにしメールと講義から、視野狭窄ぎみの私も、少し視野が広がる楽しさを感じています。